熙寧六年（一〇七三）38 二月、杭州在任中の作。正月から行部（部属の地方の巡察）に出て、富陽（杭州の西南約三十キロ）から新城、今の新登へ向かった。富陽から西南二十キロ、その途中の作。

新城道中 二首　其一

東風知我欲山行
吹斷簷間積雨聲
嶺上晴雲披絮帽
樹頭初日挂銅鉦

東風は　我が山行せんと欲するを知りて
吹断す　簷間　積雨の声
嶺上の晴雲は　絮帽を披らせ
樹頭の初日は　銅鉦を挂けたり

野桃含笑竹籬短
溪柳自搖沙水清
西崦人家應最樂
煮芹燒筍餉春耕

野桃は笑みを含みて　竹の籬は短かく
溪柳は自ら揺れて　沙の水は清し
西崦の人家は　応に最も楽しかるべし
芹を煮　筍を焼きて　春の耕に餉す

【語句】○東風・吹断の二句…擬人法の代表的な例といってよい。○簷間…のきば。　○嶺上・樹頭の二句…蘇軾の詩にみられる独特な比喩の一つの例。○絮帽…わた帽子。絮はわた。○銅鉦…どら。「『日の没せんと欲して懸鼓の如くなるを見よ。（観無量寿経による表現）』蘇東坡詩選（小川・山本より引用）。」○西崦…太陽のはいる所と考えられた崦嵫山。屈原の「離騒」にもみえる。ここはもとよりたんに西の山。○煮芹…芹は湿原に生える。杜甫の詩に「盤には剥ぐ白鴉谷口の栗、飯には煮る青泥坊底の芹。」（崔氏の東山の草堂）○焼筍…蘇軾の「際準郎中迎へ見れて西湖に遊ぶに和す」の第三首。「相携へて筍を焼く　苦竹寺、却下して藕を踏む荷花の洲。」○餉…旅人や田に働く人に食物をおくる。かれいいする。

【解釈】春風は　わたくしが山歩きしようとしているのを悟ってか、軒端に積もっていた　淋雨の音を、今日はすっかり吹きはらってくれている。山の頂には　ちぎれ雲がわた帽子をかむせており、こずえにはさしのぼった太陽が銅鑼をぶら下げている。野のももは低い竹のまがきから、笑みを含んだ顔をのぞかせ、谷川の柳はすきとおったなぎさの水の上に小枝を揺らせている。西の山のふもとの家々では、いまいちばん楽しい気持ちでいるに違いない。芹を煮、筍を焼いて、春の耕作のお弁当を作つくっているのだから。

「蘇軾」近藤光男より抄出